東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十四卷　第一號

大正十一年一月一日發行

マルクス氏餘剰價値說の評論　法學博士　田島錦治
我邦の所得稅を論ず　法學博士　神戸正雄
奴隷制と賃勞働制　法學博士　河上肇
累進稅の根據に就いて　法學博士　小川鄕太郎
植民政策上より觀たる委任統治　法學博士　山本美越乃
小作制と小作法　法學博士　河田嗣郎
社會の團結の減衰　文學士　高田保馬
海運に於ける競爭と獨占　法學士　小島昌太郎
舊尾張藩に於ける地割制度　農學士　奥田彧
財産稅と國富統計　法學士　汐見三郎
開城簿記の起源に就て　法學士　大森研造

經濟論叢　第十四卷　第一號（通卷第七十九號）　大正十一年一月發行

マルクス氏餘剩價値說の評論（一）

田島錦治

緒說

マルクス氏の餘剩價値說は、氏の社會主義の樞軸を成す所のものにして、而も其淵源をチユルゴー、アダム・スミス、リカードー諸氏の經濟學說に發し、同主義に附與するに科學的社會主義なる過當なる名稱を以てせしめたるものなり。マルクス幷ひにロードベルツスやラツサールを一括して科學的社會主義者と爲し、彼等以前の社會改革論者例へはサンシモン、フーリエル、ルイ・ブラン、ロバアト・オーウエン等を空想的社會主義者（Utopean Socialists）と爲すの當否に關しては頗る議論あり。且謂ゆる科學的社會主義の大本尊と崇めらるゝマルクスの所說は概して消極的批判的にして、積極的建設的に非す。詳言すれは、現代の經濟組織の缺陷を攻擊する爲に過當の言辭を弄して、敢て憚る所無しと雖も、自己の主義の實行方法施設等に關しては、沈々默々、稀に片鱗を滄波の間に現はすに過きさるなり。マルクスか千八百六十七年に刊行したる「資本論」

(Das Kapital, Kritik der politischen Oekonomie)卽ち同書第一卷は、氏の歿後氏の親友エンゲルスの盡力に依りて千八百八十五年と千八百九十四年とに刊行せられたる第二卷及ひ第三卷と共に、社會主義のバイブルとして同主義者の珍重崇拜する所なれとも、此尨大なる難解の書は社會主義的未來國家の說明を爲すこと無し。シエフレーか千八百七十四年に「社會主義の精粹」の名を以て刊行せる小冊子 (Schaeffle, die Quintessenz des Sozialismus) は、マルクス主義實施の場合に於ける社會の縮圖ともいふへきものなり。而して此縮圖に依れは、マルクス主義も亦竟に一のユートピヤに過きさるなり。此點は他日別に題を設けて之を論評すへし、而して本論に於てはマルクス主義の樞軸たる餘剰價値說の誤謬を指摘し、同主義者か自ら稱して科學的社會主義なりと誇るの理由無きを辯駁せんと欲す。蓋しマルクスの餘剰價値は、氏か勞働を以て啻に價値の測度又は原因と爲すのみならす、其實質と爲す考に本つく。而して此考はリカードーの說に本つき、リカードー氏の說は更にアダム・スミスに本つく。スミス及ひリカードーの說は既に謬る、本源既に濁るに何ぞ下流の淸きを望まん。況やマルクス獨特の詭辯、彼の怪奇なる循環論法、彼の獨斷的推論は、既に濁れる源泉を受け之に淤泥を投して攪亂するに髣髴たるものあるに於てをや。

マルクスの餘剰價値說を批評し、其誤謬を指摘せる知名の學者は固より其人に乏しからす。而して佛國經濟學者の泰斗ポール・ルロワ・ボーリユー氏か其名著「集産主義」に於て爲したる周到詳

密なる評論は、マルクス主義の堡壘を悉く打破して、方寸の餘地を止めさるの概あり。余か本論を草するに方り、此書に負ふ所最も多し、特に同書の第二編第四章乃至第五章は本論の主要なる源泉なり。(Paul Leroy-Beaulieu, Le Collectivisme, Examen Critique du Nouveau Socialisme, 1ᵉéd. Paris 1884, 5ᵉéd. 1909)。

第一節

商品の循環を以て資本の起源と爲し、及ひ貨幣を以て資本の出現する最始の形式と爲すの誤謬を論し、資本の最始の發生に後れて貨幣の出現あることを論す。

マルクスの「資本論」第一卷の中其第一部は「商品及ひ貨幣」(Waare und Geld)を論し、交易價値及ひ使用價値(Tauschwerth und Gebrauchswerth)の區別を說けとも、此部分は格別重要なるものに非す。第二部は「貨幣の資本に變化する事」(die Verwandlung von Geld in Kapital)を論し第三部は「絕對餘剩價値の生產」(die Produktion des absoluten Mehrwerths を論し、第四部は「相對餘剩價値の生產」(die Produktion des relativen Mehrwerths)を論せり。此第三部及ひ第四部は最も重要にして、社會主義の核心を成すものなり。

マルクスは資本の一般形式を論して曰く『諸商品の循環は資本の出發點なり。諸商品の生産、及ひ諸商品の發達せる循環、即ち商業なるものは資本の由て生まるゝ歴史的條件を成す。世界的商業及ひ世界的市場は、第十六世紀に於て、資本の生命の近代史を開始したり』と（資本論第一卷第八版一九一九年一〇、九頁、ルロワ・ボーリユー氏集産主義二六二及二六三頁）

此說はルロワ・ボーリユー氏か以て循環論法（une pétition de principes）と爲し、歴史的事實の觀察を誤まり、學理上に於ても正確に非すと爲す所のものなり。夫れ資本は過去の生産物の蓄積にして將來の生産に供せらるゝものなるは人の皆熟く知る所なり、約言すれは資本は生産物にして生産方便たるものなり。生産方便としての資本は、勞働を助けて之を容易ならしむるものなり此意味に於ける資本は未た交易行はれす、商品なるもの未た現れさる未開野蠻の時代に於て既に出現す、最も古き吾人の祖先たる石器時代の人か生産上使用したる粗末なる石器は固より資本なり。之を現代吾人の使用する紡績機械、汽罐車等に比すれは簡單と複雜、粗野と精巧との差はあれとも、資本たることは則ち一なり。勞働を助けて之を容易にするものなるは則ち一なり。然るにマルクス幷にラツサールは資本を以て新なる且移り易るへき史的事項（une Catégorie historique nouvelle et transitoire）なりと爲し、人類發達の初期には未た出現せさるものと爲す、是れ豈正當なる歴史觀と謂ふを得んや。

マルクス曰く『諸商品の循環の最終の生産物は貨幣なり』と。又之に附加へて曰く『諸商品の循環の此最終の生産物は資本の出現の第一の形式なり』と(資本論一卷一〇九頁)此說は當らず。資本は貨幣の交易に參加するを待たずして既に存在するものなり。貨幣は其金屬貨幣たると計算上及ひ約束上の貨幣たるとを問はず、共に資本に後れて出現したるものなり、交易の未た行はれざる社會、卽ち謂ゆる孤立經濟若くは家族自給經濟の時代に於ても、資本は既に存在したり。自家の需要を滿す爲めに家族か或は耕やし、或は織るに使用したる鋤鍬織機の類は卽ち資本なり。現時の社會に於て資本か頻りに交易に連繫するの事實はこれ有れとも、資本を以て貨幣又は交易の現象に從屬する現象なりと爲すは、歷史上幷に學理上に於て謬れり。

マルクス曰く『歷史上に於て、資本は到る處に土地的財產と反對に、先つ貨幣の形式を以て、卽ち貨幣的財產、商人の資本及ひ金貸の資本 (Geldvermögen, Kaufmannskapital und Wucherkapital) として現はる』と(一〇九頁)。此考察はラッサールか資本を以て奴隸を所有する大地主か案出せる分業より生まるゝものと爲す說と異なれり。要するに此マルクスの考察は事物を絕對的でなく、唯相對的及ひ近似的の意義に取るに於ては、幾分の眞理を含むと雖も、此次等の眞理は經濟學的觀點に於て未た多く重要視するに足らざるなり。

マルクス曰く『各の新なる資本は第一に舞臺の上に現はる、詳言すれは特殊の過程に由りて資

本に變化する所の貨幣として、常に市場、商品市場、勞働市場、金融市場に現はる』と(資本論一卷一〇九頁)。此考察は前掲のものよりは一層ひろく現時の社會に當箝るものゝ如しと雖も、茲に留保を要するは、貨幣と資本とを混同せさることなり。卽ち貨幣はたゞ生產せらるゝ商品を代表する仲介物若くは生產せらるゝ商品に對する權利に過きさるの點なりとす。

夫れ貨幣はすへての財貨の價値の測度として交易に媒介するものなるか故に、資本も亦貨幣を以て其價値を測定せらるへきは當然なり。然れとも資本は貨幣と同しからす。例へは一工業者か百萬圓の資本を有すといふときは、彼の工場諸設備、機械、器具、諸原料、燃料等凡そ彼の生產方便を形成する所の財貨の貨幣的價格か百萬圓に相當すといふに外ならさるなり。蓋し彼は幾分かの現金又は紙幣をも資本として所有するなるへし、然れとも是亦早晩職工への賃銀として支拂はれて彼等の衣食往に變するか、又は其他の支拂に充てられて同樣貨幣以外の物件に化すへきものなりとす。キルヘルム・ロッシェル（W. Roscher）か『貨幣は最も一般に使用され得へき資本なれとも、而も全體に於て國民的資本の一小部分を成すものなり』と謂へるは實に肯綮を得たる說と謂ふへきなり。(Roscher, Grundlagen der Nationalökonomie, 22te Aufl. 1897. S.116)。

第二節　資本としての貨幣の循環か餘剰價値を生すとの說及ひ其批評。

前節の末に述へたる如く、マルクスは總ての新なる資本は、貨幣の形式を以て社會に現はるゝものなりと爲す。而して氏は此出發點よりして、遂に資本の利潤は無償勞働に外ならすとの結論に到達するに、如何なる推論を試むるかといふに、實に次の如し。

マルクスの說に據るに、商品の循環の直接なる形式は、一の商品か一の額の貨幣に變し、一の額の貨幣は更に他の商品に變するものなり。即ち貨幣の媒介に依る、一の使用價値と他の使用價値との交易なり、例へは麵麭と靴との交易なり。是は商品の循環の原始的形式にして、而も經濟學は單に此形式のみを注目すと、マルクスは謂へり。

然るに、資本主義の社會に於ては、循環の諸項は轉倒す。貨幣は最終に再ひ貨幣に變する爲に先つ商品に變す。即ち先つ一の交易價値を變して、一の使用價値と爲し、更に此使用價値を變して、終に他の交易價値に到達するなり。資本主義の社會に於ては、財貨の生產に就ても、人は使用價値を專念せすして、單に交易價値を追求す。故に貨幣は亦生產の出發點にして、且其歸着點なり。生產者は其生產物を所有するも、之を自から消費するを目的とせすして、之を賣りて貨幣

を獲得するを目的とす。

然れとも、斯の如く貨幣を先つ商品に變し、更に商品を再ひ貨幣に變するは、一見無益の手數にして、一の重復に外ならさる如しと雖も、實は然らす。蓋し商品の循環の原始的形式に從へは例へは麵麭を有する人か、之を賣りて貨幣に代へ、更に之を以て其欲する靴を買ひたり。此場合に貨幣を先つ投して麵麭を買ひたる人も、又麵麭を賣りて終に靴を買ひたる人も、共に其欲する使用價値を得たるものにして、彼等の行爲は徒勞重複に非す。然るに、資本主義の社會に於ては資本主は貨幣を投して、商品に代へ、再ひ此商品を貨幣に代ふるは、徒勞重複の如く見ゆれとも實は此手續を絕えす反覆することに由りて、彼は利益を獲得す。卽ち彼は百圓を投して、或商品を買ひ、之を賣りて百十圓を得、又此百十圓を投して、或商品を買ひ、之を賣りて百三十圓を得斯の如く彼は資本としての貨幣の絕えさる循環の更新に由りて、絕えす利益を獲得す。此利益はマルクスの餘剰價値（Mehr-werth）と名けたるものなり。氏か資本を以て黃金の卵を生む能力を有すと爲す所のものなり。（前揭資本論一卷一一〇——一一八頁）。

此マルクスの說明は巧妙にして、人を魅するの力ありと雖も、決して總ての點に於て正確なりと謂ふを得す。先つ第一に反駁すへき點は、此說明は唯商業資本又は金融的資本にのみ適用され得へきも、工業又は農業の資本には適用され得さること是なり。且商業資本又は金融資本としての

貨幣の單純なる循環か餘剰價値を生するものとせは、總ての商人及ひ銀行者は富み榮ゆへき筈なるに、實際に於て辛ふして存立を保つ者多く、且失敗破産する者も亦尠からさるは、マルクスの説明の不確實なるを證すと謂ふ可きなり。

實に商人又は金融業者か其資金を運轉するは、固より利潤又はマルクスの謂ゆる餘剰價値を得るを目的とすれとも、此目的を達すると否とは、主として彼等の能力手腕に依るなり。然るにマルサスは此重大なる利潤の原因を全然看過し、資本としての貨幣か單に循環に由りて增殖すと漫然説き來り説き去りて、毫も其根據を示さゝるは、氏亦遂に循環論法に陷ゐるの批難を免かるゝ能はさるなり。

第三節　交易即ち同一價値の交易は餘剰價値を生せすとのマルクスの意見、コンヂャックの説に對する駁論及ひ其批評。

マルクスは其の『資本の循環は餘剰價値を生む』との説を展開し、商業及ひ金融資本に於けると同樣に、工業資本に於ても亦其適用を見ることを説明したり。氏の考に從へは、工業上の利潤は資本の生産力又は企業者の智能の結果に非す、約言すれは爲されたる給付の結果に非すして、資

本主か勞働者の勞働を悉く我物と爲し、唯其一部分に就てのみ勞働者に支拂ふに由りて得る所のもの(卽ち無償勞働に由る所の餘剰價値)に外ならすと爲すなり。

マルクスは此論題を說明するに方りて、非凡なる巧智を現はし、其矛盾誤謬を包むに魅人的修辭と驚世的博識を以てせるか故に、氏の言の跡を逐ふて詳に之を考査するは學問の研究上甚た利益ありとす。氏は其所謂格言『同一なるものは利益なし』("wo Gleichh it ist, ist Kein Gewinn;" "Dove é equalita, non é lucro," 〔Galiani〕) の句を揭け、更にル・トロース (Le Trosne) や、メルシエー・ド・ラ・リヴイエール (Mercier de La Rivière) 等の言を引證して、凡そ商品の交易は當事者双方をして、只使用價値の上に於てのみ利益を得せしむれとも、交換價値の上に於ては (同一價値の交易なるか故に) 何等の餘剰價値を生するものに非すと論したり。

氏は此見地よりコンヂヤック (Condillac) の說を揭けて且之を駁擊せり。抑もコンヂヤックか千七百七十六年卽ちアダム・スミスの「國民の富」か刊行せられたる同年に公にしたる「商業及び政府に就て」(Du Commerce et du Gouvernement) と題する書中に含まるゝ所の價値說は、殆と次の世紀に發達したるジェヴォンス (Jevons) や墺國學者の理論に符合する所の卓見として尊崇せらるゝ所、而して之と對照してスミスの價値說は不完全にして、前後矛盾する所あり、且誤謬を含むと稱せらる。スミスの使用價値と交易價値との別を擧け、財貨の交易價値の原因及ひ測度を勞

働と爲したる考は明かにマルクスの繼承する所なり。宜なる哉其コンヂャックの説に反對するや

マルクスの擧けたるコンヂャックの説に曰く『貨物の交易に於て、同一價値か同一價値に對して交易せらると謂ふは誤れり。反對に、兩交易者の各は常に大なる價値に對して小なる價値を與ふ……若し實にいつも同一價値か與へらるゝならは、交易者は何人も利益を得ることなかるへきなり。然るに兩者は共に利益し、又は利益すへき筈なり。何となれは、物の價値は只吾人の欲望に對する其物の關係より成り立ち、而して一人に向ての過多は他人に向ての過少にして、其反對は反對なれはなり……吾人か自己の消費に向て必要缺く可からさる物を賣るへく提供すと云ふことは之を豫想するを得す……吾人は其必要とする所の物を受取らんか爲に其不要の物を差出すを欲す、吾人は多きに對して少きを與ふるを欲す……蓋し交易せらるゝ各物品は其價値を測定する金の量に於ては同一なるか故に、吾人か交易を以て同價値に對して同價値を與ふるものなりと判斷するは無理ならぬことなり……然れとも茲には他の點を考慮の中に置くを要す。卽ち吾人双方は過剩のものを必要のものに對して交易すること是なり』と。

マルクスは此コンヂャックの説を以て、啻に使用價値と交易價値とを混同するのみならす、現代の發達せる所の商品生産を行ふ社會（Gesellschaft mit entwickelter Waarenproduktion）を引き下けて、夫の生産者か重に其必要とする財貨を自から生産し、唯自己の需要を滿たして猶餘れる

部分（Überfluss）のみを賣却したる經濟狀態と爲したる實に子供らしき說なりと反駁したり。（資本論一卷一一八——一二二頁）。

マルクスか氏自身の時代（卽ち資本論の第一版か出たる千八百六十七年の前後）を以て發達せる商品生產の時代となすは、猶ほ可なりとするも、コンヂャックか其『商業及ひ政府』を著はしたる時代卽ち千七百七十六年の頃は、歐洲に於ては大規模の機械的工業は漸く其端緒を發したるに過きすして、所謂註文企業又は家內工業か最も多く行はれ、而して殊に農村に於ては自給的生產か最も重なる部分を占めたるは毫も疑を容れす。且現代卽ち二十世紀の今日と雖も、自給的生產又は註文生產は決して其跡を絕つことなく、而して國際貿易に就て見れは、貿易の目的物は卽ち商品なりと雖も、各國民か互に過多を以て過少と交易して、互に相利益するものなるは明かなり。然らはマルクスかコンヂャックの子供らしきを嘲けるは當らすして、寧ろマルクス自身の大人らしからさるを見るなりマルクスは現代の生產者は互に自己の消費せさるものにして、他人の需要するものを生產し、互に交易すと思考す。是れ交易を以て有無相通すとする說なり。コンヂャックは餘剩を以て不足と交易とすと思考す。是れ交易を以て長短相補ふとする說なり。有無相通も長短相補も、實はそれ等自身相通相補の說にして、外皮は異なる如しと雖も本質は一に歸すへし。

然り而してマルクスがコンヂャックを以て使用價値と交易價値とを混同すと爲すは、却てマルクス自身が使用價値と交易價値とを分離して、両者の密接關係を理解せず、約言すれは價値の眞義を誤解することを表明するものなり。

コンヂャックは其著書の首章に於て、價値の理論が經濟學の基礎なることを說き、效用(utilité)を以て價値(valeur)の第一根源となし、而かも其效用なる語に附するに世俗が通常附する所の物質的性質と爲さずして、物と人の慾望との間の或る連絡(correspondance)なりと爲したり。故に氏は曰く『價値は物(chose)の上に於てよりは、寧ろ吾人のそれに對する尊重(estime)の上に之れ有るものなり、而して此尊重は吾人の欲望(besoin)に比例するものなり、即ち價値は吾人の欲望の增減に從ひて增減するものなり』と(Condillac, Du Commerce et du Gouvernement, p.15)

コンヂャックは效用を以て價値の唯一要素と爲さず、分量即ち物の稀少なるか又は潤澤なるかは、價値の決定に大關係を有するものなりと爲せり。氏は曰く『物の價値の根源は欲望に在るか故に、欲望の烈度の大なる物ほど價値は大に欲望の烈度の小なる物ほど、價値は小なるべきは當然なり。故に物の價値は稀少の時に增加し、潤澤の時に減少す、而して潤澤は遂に物の價値を全然無に歸せしむることあり、例へは餘りに潤澤なる物(un bien surabondant)は吾人に全く無用となるべきが故に價値なしと』(前掲書 1re part. Ch. II)。

コンヂヤックの謂ゆる效用は、略ほアダム・スミスやマルクス等の謂ゆる使用價値（value in use, Gebrauchswerth）に該當して、猶同しからさる所あり。而してコンヂヤックの謂ゆる價値は略ほ交易價値(value in exchange, Tauschwerth)に該當す。氏は價値の要素を以て效用と分量とに歸するは後世の限界效用説に先鞭を着けたるものと謂ふ可く、之を以てマルクスが勞働を以て價値即ち交易價値の唯一原因又は要素又は測度と爲すの説に比すれは、其經濟理論上に於ける價値亦同日の論に非さるなり。マルクスか價値の要素たる勞働を社會的必要なる勞働といふは知らす識らす效用要素説に降參したるものと謂ふ可きなり。

アダム・スミスは使用價値と交易價値とを全然無關係又は相背反する觀念の如くに取扱ひ、且一且此區別を爲して數言を費やしたるのみにて、其後には使用價値の問題は全く之を放棄して顧みす、單に交易價値のみに就て言論を費やしたり（Wealth of Nations, Bk. I, Ch. IV）マルクスは之に反して此両種の價値に就て、反覆詳説する所ありたり。然れともマルクスも亦使用價値若くは效用か交易價値の眞の根源たるを認めすして、勞働を以て其唯一根源と爲すは、蓋しスミスの誤謬を襲きたるものと謂ふ可きなり。

マルクスは、凡そ商品の交易は、當事者双方をして、只使用價値の上に於てのみ利益を得せしむれとも、交換價値の上に於ては(同一價値の交易なるか故に)何等の餘剰價値を生するものに非

すとの意見を、酒を賣りて穀物を買ふ甲者と穀物を賣りて酒を買ふ乙者に取りて說明せり。曰く『使用價値に就て言はゝ、双方か或利益を得へきや明なり。何となれは双方は各其使用價値として不要なるものを他に與へて其使用に要するものを受くれはなり。而して此外に尙ほ一の利益あり。例へは、酒を賣りて穀物を買ふ甲者は、穀物を作るを業とする乙者よりは、同一の勞働時間に於て多分一層多くの酒を生產し得るなるへく、又穀物を作るを業とする乙者は、酒造家の甲者よりは、同一の勞働時間に於て、一層多くの穀物を生產し得るなるへし。故に交易なき場合に、両人か各自に向て酒及ひ穀物を造らねはならぬ時より、同一の交易價値に對して、甲者は一層多くの穀物を得、乙者は一層多くの酒を得へきなり。故に使用價値に就ては、交易は當事者双方を利益するものと謂ふを得れとも、交易價値に就ては、然らず」と（資本論一卷一一九―一二〇頁）。

マルクスは使用價値と交易價値とを分離して考察すること斯の如し。宜なり、其コンデャックの說と枘鑿相容れさることを。マルクスは前揭のコンデャックを駁擊せる語に附加えて曰く『輓近の經濟學者は尙ほ往々コンデャックの說を繰返す、特に貨物の交易の發達せる形式、卽ち商業に就て、彼等は其餘剩價値を生產するものなるを說く。一例を擧くれは、曰く、商業は生產物に價値を附加す、何となれは同一の生產物は、生產者の手に在るよりは、消費者の手に在る方か多

くの價値を有すれはなり。故に商業は嚴格の意味にて生産的行爲と認定すへきものなりと。然れとも吾人は貨物に對して二重に、一度は其使用價値を、次は其交換價値を、支拂ふものに非す。而して縱令一貨物の使用價値は、賣手に向てよりは買手に一層多く役に立つへしと雖も、其貨幣的形式（Geldform 交易價値を指す）は買手よりは賣手に一層有用なり。若し然らすとせは賣手は賣らさる筈なり。論者の言ふ所の如くなれは、吾人は更に斯く言ふを得へし、曰く、買手は例へは商人の靴足袋を貨幣に變化したるに由りて、嚴格の意味にて一の生産的行爲を爲したるものなりと』（資本論一卷一二二頁）。

以上掲けたるマルクスの言論は畢竟使用價値と交易價値との密接關係を知らす、又は效用かい値の眞の根源なるを知らさるに坐する謬論詭辯なり。若し前掲コンヂャックの説幷に之より發展し來れる輓近の限界效用説を參照すれは、マルクスの價値説の誤謬は明白なり。然れとも余は本論文に於ては、限界效用説を述ふるの繁を避け、マルクスの一の詭辯か如何に更に他の詭辯を惹起するかを檢査せんと欲す。

マルクスは前述の如く同價値の交易か餘剰價値を生する理なしとの前提よりして、商人又は金貸か如何にして金を儲くるかに關しフランクリンやアリストテレスの片言隻句を擧けて、商人又は金貸か資本即ち餘剰價値を作るは欺僞不正に基くものなるかの如く論斷せるは、マルクスか猶

ほ自然法則學派（Physiocrats）の商業及ひ利子に關する謬想に捕はれ居るを見るなり。即ちフランクリンの語として掲けられたるは『戰爭は盜奪なり、商業は概して欺僞なり』の一語なり。アリストテレスの話とは『Chremastistik（理財の術）には二種あり、商業と經濟（Oekonomik）なり、後者は必要にして且稱賛すべきものなれども、前者は財貨の循環に基つき、正義上より非難さる可きものなり（それか自然の上に基かすして、相互の欺僞の上に基つく故に）。故に金貸か惡まるゝは最も正當なり、何となれは、貨幣か其發明されたる目的に向て用ひられすして、彼の利益の根源となれはなり。貨幣は元來貨物の交易に向て作られたるものなり、而るに、利子は貨幣より出てゝ餘分の貨幣を生む。故に利子又は子息の名稱あり。何となれは、生れたるものは、生む者に肖れはなり。されと利子は貨幣からの貨幣なり、故にあらゆる金儲けの方法中にて、利子は最も自然に反するものなり』との一節なり。（資本論一卷一二七頁）。

然れともマルクスの說の此部分は餘り重要ならす。氏は其謂ゆる資本主の螟蛉（Kapitalistenraupe）か如何に蝴蝶化（Schmetterlingsentfaltung）するかに就ては、氏は非凡なる天才を、工業に於ける餘剩價値成立の說明に於て發揮したり。（前掲書一二九頁）。

第四節　工業に於ける勞働力の購買、勞働力の價値に關するマルクスの說、及ひ其批評。

前述の如く、マルクスは、財の只の循環は餘剰價値を生せすと思考す。然らは貨幣所有者卽ちマルクスの所謂資本主の螟蛉か胡蝶化して眞正の資本主となり、且益々其資本を增加する爲には如何なる方策を執るやといふに、マルクスは之を以て謂ゆる勞働力（Arbeitskraft）の購買及ひ使用に在りと爲す。

マルクスに從へは、勞働力とは活きて居る人の身體に存在する所の肉體的及ひ精神的堪能の總量にして、彼かいつも或種類の使用價値を作らんとするときに、それを働かす所のものなり。扨貨幣所有者か商品としての勞働力を市場に見出す爲には、種々の條件の存立を要す。第一に、此勞働力の持主か自由なること、及ひ彼は彼の勞働力の購買者に對して法律上平等なることを要し次に彼は彼の勞働力を彼れ自身の利益の爲に直接に使用せさるものなることを要す。故に彼は奴隷の如く他人に永久從屬するものに非さると同時に、彼自身に一切の生產方便卽ち工場機械原料及ひ生活資料を有せさるを要す。以上の條件か備はるときは、勞働力は商品として市場に賣買せらるゝとマルクスは思考したり。（資本論一卷一三〇——一三一頁）。

マルクス曰く『故に貨幣所有者は其貨幣を資本に變化せしむるには、商品市場に於て自由勞働者を見出すを要す。此自由は二重の意味を有つ、卽ち彼は自由なる人として、其の勞働力を自身の商品として處分すること、及ひ彼は外に何等賣るへき商品を有せすして、彼の勞働力を實現せ

しむるに必要なる總ての物より自由(卽ち總ての物を有せさる意味)なること是なり』と(同上書一三一頁)。

氏は此等の條件の備はるに至れるは、實に只現代資本主義的文明の下に於てのみ然るを得るものなりと思考し、『自然は一方に於て貨幣所有者又は商品所有者を、而して他方に於て只自身の勞働力のみの所有者を生せす』と曰へり。(一三一——一三二頁)。氏の說に從へは、勞働市場の成立には永き經濟的進化の道程を要したり。而して此市場に於ける買手と賣手との間に於て、勞働力なる商品の價格は何に由りて定まるやの問題に關して、マルクスか嘲弄的に命名したる通俗的經濟學派(Vulgärökonomie)は、此價格を定むるものは需要と供給との關係なりと答ふれとも、是はマルクスの不完全として排斥する所なり。マルクスに從へは、勞働力は他の總ての商品の如く契約より獨立し、且契約の以前より存在する一價値を有す。此價値は卽ち其生產費なり。人の勞働力の生產費とは何そ、曰く彼の生命健康の維持及ひ彼の再生產卽ち彼の家族の維持子女の教育に要する費用是なり。此等の諸費用は各種職業者の間に千差萬別なれとも、人の勞働力の平均生產費は之を想像し得へしとす。

此勞働力の交易價値は維持及ひ再生產の諸費用に由りて定まるとの說は、ラッサール氏か黃銅法則(das eherne Lohngesetz)と命名したるものと同しくして、リカードー、マルサス、チュルゴ

ー等の夙に唱へたる所なり。此說に從へは、縱令產業は如何程進步すとも、勞賃は勞働力の維持及ひ再生產の費用に由りて定まる所の率を永く超ゆる能はす。(資本論一卷一三三——一三五頁)、

此說はルロワ・ボーリュー氏か又一の petitio principii と爲し、正當に非すと爲す所なり。氏は曰く『吾人の實驗及ひ統計の示す所に依れは、多くの國々に於て（若し總ての國に非されは）勞働者の賃銀卽ち勞働力の價格は此力の保存に向て是非とも必要なるものゝ上に達せり。若しマルクスの公式(la formule)を正しとせは、五十年以來又は百年以來勞働者の人口の全體の地位か疑も無く改善せられたる事實は不可解となり、且これを自然に反する事實とせさるを得さるに至らん。然れともこれは現に一般的事實なり、故に自然に一致するものと認むへきものなり』と（集產主義二七二頁）。

この駁論は先つ余輩の意を獲たるものなり。蓋しマルサス及ひラッサールは其謂ゆる勞働力の保存費又は最小生活費を以て常に一定不變と爲すものに非すして、國に由り時代に由りて變動すと爲すものなり。マルクス曰く『食物衣服薪炭住宅等の如き自然的欲望は一國の氣候及ひ其他の自然的狀況に從ひて異なる。又他面に於て謂ゆる必須的欲望の範圍、幷に此等を滿たす方法は歷史的に發達せるものなるか故に、大部分は一國の文明の程度に從ふものにて、特に自由勞働者階級か成立するに至れる諸條件と、之に伴ふ彼等の慣習及生活上の諸要求(Lebensansprüche)に從

ふものなり。是故に勞働力の價値を定むるものは、他の商品の場合と異なりて、一の歴史的及ひ道德的要素（ein histnrisches und moralisches Element）を含むものなり。然れとも一定の國、一定の時に於ては、勞働者の生活必要物の平均量は實際上知られ得るものなり』と（一三四頁）。

此勞働力の價値決定に歴史的及ひ道德的要素を含むとの言は、大に注意すへきものなり。實に此言はマルクス自から其主義を破壞するものと謂ふへし。何となれは若し果して此歴史的道德的要素か存在すとせは、勞働力の生産費即ち其價値は曩にマルクスの言へる如く契約前に確定せるものに非すして、其一部は勞働者、又は寧ろ其階級の自由意思に由りて左右せらるゝものとなるへけれはなり。

マルクスは更に進みて、勞働力の價値は諸生活方便の一定量の價値と合致し、且之と共に變動し而して諸生活方便の價値とは其生産に要したる勞働時間の量なりと論したり。氏は諸生活方便の中に日々に購買消費するもの、毎週、毎月、又は毎年購買消費するものあれとも、此等を合算して、更に一日の平均生活費を算出し得へしと論せり。マルクスは此一日の平均生活費即ち勞働者の勞働力の日々の維持及ひ再生産に要する諸生活方便の價値を六時間勞働と假定し、之を貨幣價格に見積りて三志と假定し、此三志若くは六時間勞働（即ち半日勞働）か一勞働者の勞働力一日の交易價値なり、故に若し勞働力の所有者か之を一日三志にて賣れは、其賣り直段は恰も其價値に

均しく、而して貨幣所有者にして其三志を資本に變せんと企つるに於ては、必す此價値を支拂ふ可しと論したり（一三五頁）。然れとも斯の如き假定及ひ推論は亦一のペチチオ・プリンチピイに外ならす。

貨幣所有者は其資本主となる道程に於て、生産に要するすへての物、例へは綿花、機械、工場勞働力等を買ひたり、斯くして現時の工業界に資本主と勞働者とか對立す。勞働者即ち勞働力の賣手は資本主即ち勞働力の買手の監督の下に働き、而して彼は其生産物の所有者に非すとはマルクスの屢々反覆する所の説なり。然れとも其生産物といふは當らす、宜しく共同生産物といふへきなり。何となれは機械工場等に由りて補助せらるゝ勞働の生産物を單に勞働の生産物といふは亦一のペチチオ・プリンチピイに外ならされはなり。

マルクス曰く『資本主義の生産方法の行はるゝ各國に於ては、勞働力に對して賃銀を拂ふことか、常に契約上定まれる時期、例へは一週間働きたる後に於てするを常とす。故にすへての場合に於て勞働者は其勞働力の使用價値を資本主に前貸するものと謂ふへし、即ち賣手は買手をして其價を支拂ふ前に消費せしむるものなり、即ち勞働者は常に資本主に信用を與ふるものなり』と（一三七頁）。此説は經濟學者の通説に反對す。通説に依れは、資本主（一層適當にいへは企業者）か勞働者に信用を與ふものなり、何となれは企業者は其生産物を賣りたる後に非されは、彼の生

産費の回收及ひ利潤を得る能はされとも、勞働者は生産物の賣れると否とに關せす賃銀の支拂を受くるものなれはなり。此マルクスの言は尤らしき詭辯なり、而して氏の數頁前の處にて述へたる言は恰も後の此言を打消すを發見す。氏は曰く『人か勞働力以外の商品を賣る爲には勿論生産方便、例へは原料機械等を有せさるへからす。彼は革なしに靴を製する能はす。彼は此外に生活方便を要す。何人も——未來音樂者 Zukunftsmusikant と雖も——未來の生産物又は未成品の使用價値にて生活する能はす』と（一三一頁）。然らは未來の生産物又は未成品の使用價値にて生活する多數の勞働力所有者は、資本主に信用を與ふる者に非すして、彼より之を受くるものなるに非すや。

然れとも此マルクスの詭辯は、一面に眞理を含み、且實用あることを否む可からす、何となれは若し生産物か全く出來上りたる時又は其賣却せらるゝ時迄待つは、到底勞働者の堪え得る所に非す、且半月毎に又は一月毎に賃銀の仕拂を受くることも亦多くの場合に於て勞働者に不便を惹起するものなれはなり。

以上勞働力の性質、價値、市場、及ひ資本主か之を購買する手續等に就て、マルクスの說を述へ且之を論評したり以下更に節を改めて、勞働力の使用及ひ謂ゆる餘剩價値の成立に就て論究する所あらむ。（未完）